

## 河内というところ ～富士川の葦辺から～

伊藤 洋 (山梨県立大学学長)

面積 275 平方キロメートルの甲府盆地を流れる幾百本の小川はやがて笛吹と釜無の二本の河川に収斂され、最後に真南に向かう一本の大河富士川となって駿河湾に注ぐ。

この合流点鵜沢から河口岩渕<sup>いわぶち</sup>までの南北 72 キロメートルとこれを中心軸にして東西 30

キロメートルの切り立った山峡を「河内」<sup>かわうち</sup>と<sup>くになか</sup>いって、甲府盆地の別称である「国中」や

富士北麓<sup>ぐんない</sup>の郡内地方と分類される。ちなみに、漱石の『虞美人草』<sup>1</sup>に出てくる布団の郡内は富士北麓が絹織物産地で八端織の布団地を産したところからの呼称である。戦国の勇武田家にとって、この地方は駿河の今川家を牽制するための要塞兼非武装地帯でもあった。

甲府盆地の北側、秩父多摩甲斐国立公園や八ヶ岳中信高原国定公園の山麓一帯、富士箱根伊豆国立公園につながる御坂山塊の中腹などは一面国内屈指の縄文文化の栄えたところだが、この河内地域 2,000 平方キロメートルの広大な山岳地域には未だに縄文土器のかけら一つ発掘されていない。まして、水田耕作するような平地もないので、ここに弥生文明も起こらなかった。

太平洋から駿河湾に入って一気に 2,000 メートルの南アルプス赤石岳山頂に駆け上る海風はこの地域に大量の雨を降らせ、昼なお暗い鬱蒼たる森林がつづく。ここで伐採された用材は富士川を筏で下って、初期の江戸城の建築に使われた。これらの森が涵養する水がここかしこから湧き出て日本三大急流富士川の清流がつくられる。一帯の人間を歓迎しない峻険な地形は一方では宗教的雰囲気をかもすので、いつの時代からかこの地方には山岳宗教や真言密教の道場などが数多く立地したという。

こういう鎌倉仏教以前の宗教的環境を一挙に変革してしまったのが日蓮である。日蓮が河内の真ん中身延に招かれて庵を編んだのは 1274 年。この折の日蓮のパトロンが当

---

<sup>1</sup> 『虞美人草』では、小説のクライマックス、麗人・藤尾の死の床を郡内の太織り生地から作った最高級の布団としている。漱石には郡内織りへのこだわりの強かったことが丹治伊津子著『夏目漱石の京都』（翰林書房 2010）に詳しい。同書 P.47,48、51、55 など参照。

時河内地方「南部」の地を納めていた甲斐源氏一族の波木井実長。波木井氏は後に陸奥に移住して南部氏を興すことになる。

入山以来日蓮は活発に活動し、この地域の寺院を次々と法華経に改宗していった。中でも富士川町の小室山妙法寺については圧倒的な力でこれを「折伏」させている。

妙法寺はその開基を持統天皇の7年役小角によるとされ、その後真言密教の道場として護国院金胎寺と称した名刹であったという。日蓮が身延に落ち着いた頃の金胎寺住職は恵頂阿闍梨善智法印。両者は早速争論するところとなる。



金胎寺を訪れた日蓮に対して善智は法力によって巨岩を空中に持ち上げて威嚇する。これに対して日蓮は、善智の法力を消滅させ、この石を空中に停止させてしまう。困ったのは善智。下そうにもおろせない。しかも巨岩は自分の頭上にある。善智は日蓮に帰依することを誓った。今に残る「法論石」の謂れである。

法論に敗れた善智は、これでおとなしく日蓮の膝下に伏したのではなかった。日蓮を殺害すべく毒入りの栗餅を持参して身延を訪れた。かねて善智の心を見抜いていた日蓮は、餅の一つを庭先の白犬に投げ与えた。犬はこれを食べてばったりと倒れた。こうして悪事を見抜かれた善智法印は、法華経に改宗し寺名も小室山妙法寺と改める。

この時の犬は、日蓮の与えた毒消しの護符によって即座に生還する。以後この故事にちなんで小室山妙法寺は毒消しの護符をもって近隣の善男善女の命を守る名刹となった。筆者も子供時代、何かと言えばこの護符を呑まされた。



身延山の山裾を洗う富士川は、慶長 12 (1607) 年角倉了すみのくらりょうい以によって改修工事が着手され、5 年の歳月をかけて鰍沢から岩淵までの 72 キロが運河として整備され、明治 36 (1903) 年中央本線の鉄道開通まで国中と駿河を結ぶ物流の大動脈が形成された。これ以後、法華の善男善女は、あるは岩淵から身延への上り、あるは甲府から身延への下り、高瀬舟によって総本山参りをすることとなった。

大江戸から身延山に参詣しようという信者は甲州街道を甲府へ、そこから青柳の昌福寺を参詣後、山道を小室山妙法寺にお参りし、法論石によって毒消しの護符を求めて、鰍沢河岸に下り、そこから高瀬舟で身延に下る、これが標準コースであった。

10 年前商売繁盛を祈願して身延山に願掛けをしたために今や家業は隆盛。そのお礼のための願ほどきに一人の旅人が江戸からやってきた。型どおり昌福寺から妙法寺の法論石を出たころに降りはじめた雪はいつの間にか道を隠して、行けども行けども雪の原。宵闇は迫ってくる、空腹に寒さはつる。もはや駄目かとあきらめかけたころ暗闇の中にちらちらと灯りの漏れる一軒のあばら家。

助けを求めると出てきたのは鄙には稀な美女。隠してはいるが喉に刀で刺したような傷跡が見えた。中に招じ入れられ囲炉裏の火に生き返った旅人に、この女の記憶がよみがえってくる。尋ねてみると以前吉原にいたことがあるという。旅人はこの女と一夜を共にしたことがあったのである。女の名はお熊。好い仲となった生薬屋のどら息子と一緒になれないのを悔やんで心中。これで死にきれず、ここまで二人で逃げてきたという。相方が熊の膏薬売りに身をやつしかろうじて二人の口を糊しているという。お熊が作ってくれた卵酒に温まった旅人は、お礼にと 100 両入りの巾着から 2 両の小判を渡して奥の三畳間に休む。旅の疲れと玉子酒が効いてぐっすりと寝入ってしまった。

お熊は亭主の晩酌を切らしてしまったので近所に買出しに行く。その留守に寒さに凍えた亭主が帰ってくる。見れば流しの脇に飲み残しの冷めた卵酒。空腹にかまけてこれを一気に飲む。途端に体中が痺れて昏倒。そこへお熊が帰ってきて、

お熊：「お前さんどうしたの？」

亭主：「ながしの卵酒を飲んだら急に体が動かなくなった。イテテッー」

お熊：「お前さん、あれは奥に寝ている旅人を殺して懐の 100 両をかつばらおうと飲ませた石見銀山入りの毒酒よ。」

この会話を聞いた旅人はハッとして裏口から逃げだそうと起き上がる。だが毒のまわった脚が動かない。懐に持っていた法論石の毒消しを雪と一緒に飲み干すとこれが効いたかすぐに動けるようになった。雪原を無我夢中で逃げる。後ろから火縄銃に火を点けたお熊が迫ってくる。

旅人は絶壁にさしかかった。千尋の足下を見れば雪解け水を呑みこんで真っ黒に増水した富士川の急流。後ろは銃を構えたお熊。絶体絶命の旅人、今はこれまでと崖を飛び下りた。

激流に落ちるかと思悟していた旅人は、運よく岸につながれていた筏の上に落ちた。落ちた瞬間筏を係留していた藤蔓が切れて筏が流れ始めた。その瞬間、お熊の火縄銃が火をふいた。狙いすました弾丸は、「キーン」と岸壁に当たって飛び散った。その瞬間、筏を結わえていた綱が切れて筏はバラバラになった。ほどけた一本の材木に乗って旅人は富士川の急流を流れ始める。お熊の姿は闇に消えた。男が叫んだ。「あゝ、お始祖さまの一本のおザイモク（題目）で助かった！」（三遊亭円朝作「鯉沢」より）

角倉了以による富士川舟運が今地域の NPO によって再開されようとしている。

